



シリーズ Vol. 23

俵木理事長がトップに聞く！

サイエンスの魅力を より多くの子どもに 薬の知識は一生の財産

薬の適正使用のあるべき姿について考える対談企画。今回はアストラゼネカ日本法人のステファン・ヴォックスストラム社長との対談です。アストラゼネカでは「Japan Vision 2025」を掲げ、患者さん中心の事業を進めています。対談では、くすり教育の重要性や患者ニーズに合わせた情報発信の在り方について意見交換が行われました。

(協力：薬事ニュース編集部 野口一彦)

「患者さん」にフォーカスした新ビジョン

—まず、俵木理事長からアストラゼネカ的印象をお聞きかせください。

俵木 はじめに、新型コロナウイルス感染症の流行が続くなか、このような機会をいただきまして本当にありがとうございます。御社といえば、なんといっても、新型コロナウイルスワクチンを世界に先駆けて開発されました。アストラゼネカ社製の新型コロナウイルスワクチン「バキスゼブリア」は、日本国内での生産体制が整備されている点において画期的です。

ステファン ありがとうございます。私自身、ワクチン開発に携われたことは大変嬉しく思っていますし、会社としても



バキスゼブリア

誇りに感じています。多くの製薬企業がありますが、コロナ禍においてワクチンを開発できた企業は一握りです。アストラゼネカでは、ワクチンの開発経験は豊富ではありませんでしたが、日々学びながら供給体制を整えていきました。アストラゼネカは、すでに170カ国以上10億回分のワクチンを供給しています。利益を考えずに供給を行っており、低所得国の方にも使用いただくことができました。非常に誇りに思ってい

アストラゼネカ株式会社
代表取締役社長

ステファン・ヴォックスストラム

1996年にアストラゼネカのスウェーデン法人にMRとして入社。同法人の営業本部長やマーケティング部長を務めた後、中東欧・中東・アフリカ(CEEMEA)のビジネスディレクターとしてオンコロジー事業部門を立ち上げ、同領域の成長に大きく貢献。その後トルコ法人およびウクライナ・中央アジア・コーカサス地域法人にて代表取締役社長を務め、現職に先立ち、地域8カ国の市場を統括する北欧バルト諸国法人の代表取締役社長に就任。2018年1月より、代表取締役社長に就任している。

ステファン・ヴォックスストラム

俵木 登美子

ますし、我々にとっても学ぶことの多い機会となりました。

—アストラゼネカが日本国内において注力されている取り組み、活動方針についてご紹介ください。

ステファン 日本は、環境が大きく変わってきています。高齢化社会が進む一方で、デジタルテクノロジーを活用したスマート医療も広がっています。高齢化による医療費の高騰が進むなかで、いかに医療を提供していくかという取り組みが進んでいますが、この新型コロナウイルス感染症の流行は、その取り組みのプレッシャーテスト(加速試験)になっていると思っています。

アストラゼネカでは、2025年に向けた新たなビジョン「Japan Vision 2025」をコロナ禍以前から進めています。ビジョンでは「先駆者としてイノベーションで患者さんの人生を変えるNo.1企業になる」と目標を掲げており、フォーカスしているのは「製品」ではなく「患者さん」です。今までは治療にフォーカス

して、治療薬のマーケットシェアを高めることに注力していました。これからは、患者さんはどのようなニーズを抱えているのか、そのニーズに応えるためには何ができるのかを考えようというのが、新たなビジョンの方針です。このビジョンを実現するための柱となるのが①革新的なサイエンス②患者さん中心のビジネスモデル③働きがいのある職場—の3つの戦略です。

俵木 御社のビジョンをお聞きし、とくに「患者さん中心」の考え方が大変印象に残りました。

日本の医療においても、デジタルトランスフォーメーション(DX)が注目されています。コロナ禍において、日本はデジタル化が遅れているとの声も聞かれますが、デジタル庁が創設され、さまざまな分野でDXが推進されることとなります。DXにより医療がどのように変わっていくか大変興味深く思っていますが、御社が指導的な立場をとっていただけるのではと期待しています。御社

が進めるデジタルセラピューティクスが、世界で最も高齢化社会が進む日本で成果を上げれば、世界での貢献につながると思っていますので、ご活躍を期待しています。

高まる「くすり教育」の重要性

—協議会では、薬の適正使用の実態について、小中学生にアンケート調査を実施しました。同調査では、小学生・中学生とも、薬に関して間違った理解や使い方をしている様子がうかがえます。協議会では「くすり教育」を重視し、学習指導要領に沿った子ども向け資料の作成や、出前研修で学校の先生などに対する授業のデモンストレーションを行っています。

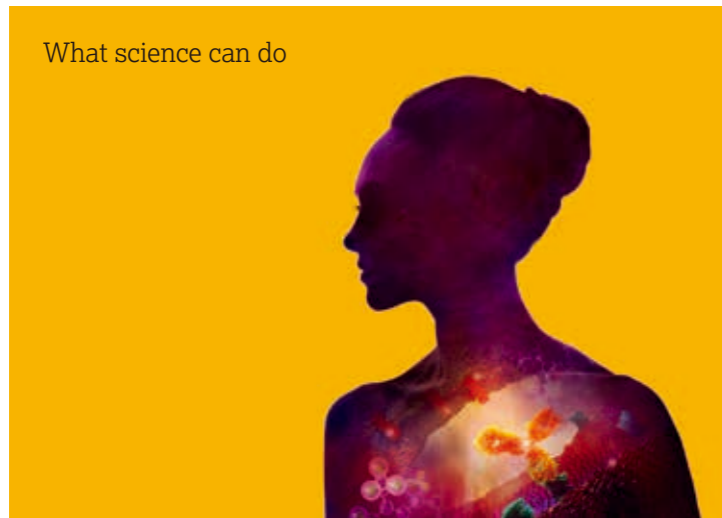
ステファン 薬は、正しく使われないと、きちんと効果が出ないばかりか、何らかの有害事象を起こす危険性もあります。薬にとっても、適正に使用されないことで、誤った評価をされてしまうこともあるでしょう。ワクチンも同じです。ワクチンも非常に高い効果がありますが、副反応も起こります。このことを理解して、薬を適正に使用していただくことはとても大事です。そういう意味でも、薬の適正使用に関する教育活動をされていることは、大変素晴らしいと思います。今後も専門性の高い医薬品が続々と出てきますので、教育の重要性はさらに高まっていくでしょう。

—一つの事例ですが、アストラゼネカでは、スウェーデンのティーンエイジャーに対して、ぜんそく治療薬の適正使用についての取り組みを行っています。その年代の若者たちは、自分は

一般社団法人 くすりの適正使用協議会
理事長

俵木 登美子





アストラゼネカはサイエンスの限界に挑む

病気だと知られたくない、できるだけ薬を使いたくない傾向が見られます。以前は、ピークフローメーターを使って適正使用に取り組みましたが、それだけではティーンエイジャーの動機づけにはなりません。そこで、たとえば、サッカー選手になるためには、薬をきちんと使用して体調を整えなければいけないと、医師とコミュニケーションを図れるようサポートしたのです。陸上選手になって走りたい、クラブに行きたくて、こういうことのほうが薬を使用する動機づけになることがわかりました。

俵木 いろいろなご経験をお持ちですね。とてもおもしろい取り組みだと思います。

協議会では、約20年前から、薬の正しい使い方に対する教育のサポートを

行っています。薬に対する知識は、一生の財産になるので、小さい頃から繰り返し話をすることが大事です。くすり教育が学校で適切に行われるよう、私たちも微力ながら活動を続けていきたいと思っています。御社もこの活動にご協力いただいています。引き続きご支援いただければと思います。—アストラゼネカにおいても、学生を対象に、近隣の学校で“サイエンス授業”を行っています。

ステファン アストラゼネカでは、日本だけでなく、世界中でサイエンス授業を行っています。アストラゼネカには、私たちがどのように働き、どのように振舞うかを示した5つのバリューがあります。それは「私たちはサイエンスを追い求めます」「私たちは患者さんを第一に考えます」「私たちは勝つことに注

力します」「私たちは正しい行動をとります」「私たちは新しいやり方に挑戦します」というものです。サイエンス授業は、このうち「私たちはサイエンスを追い求めます」に沿った取り組みです。治療薬のない疾患はたくさんあり、研究者はまだ必要です。サイエンス授業をすることによって、より多くの子どもたちにサイエンスに興味を持ってもらい、将来素晴らしい科学者、研究者に育ってもらえたらと願っています。

俵木 サイエンス授業を通して、サイエンスに興味を持つ若い人を育てる取り組みは、非常に素晴らしいと思います。ぜひ、これからも継続してほしいと思います。

情報提供には「興味をひくデザイン」も重要

—協議会では、くすりのしおり®を用いた医療者と患者さんのコミュニケーションをサポートしています。くすりのしおり®は医療用医薬品の患者さん向けの説明書として、各製薬会社に作成をお願いします、集約してホームページで公開しています。アストラゼネカにおいては、日本語版、英語版とも全製品を作成いただいています。

ステファン 多くの方が、インターネット



を最初の情報源にされています。患者さんがインターネットを最初に見たときにどのようなサイトにアクセスしているのか、信頼できる情報を見られているのかとても心配です。インターネット上には、いろいろな誤った情報がありますので、くすりのしおり®のような信頼できる情報源にアストラゼネカの製品が掲載されていることは、とても嬉しく思います。

俵木 御社のホームページを拝見していますと、患者さん向けの情報がたくさん載っています。薬の正しい飲み方、使い方、どんな副作用があるかなどの詳しい情報が、患者さんの目に付きやすいところに掲載されています。また、薬の情報だけでなく、疾患の情報やどんな治療法があるのかについても提供されています。患者中心の方針のもと、ホームページできちんと患者さん向けの情報提供に努められており、素晴らしいと感じました。ぜひ、その情報をくすりのしおり®とリンクさせてほしいです。くすりのしおり®は月に1千万アクセスあり、500万～600万人の方に見られています。その多くが患者さん、または患者さんのご家族ですので、疾患の説明や個々の薬の使い方などが見

られるのは、患者さんにとって大変役立ちます。

ステファン そうですね。アストラゼネカでは、2020年1月よりAI型チャットボットによる情報提供を開始しています。患者さん向けは「アズポート」、医療従事者向けは「アズトリート」を開発し、製品に関する質問などにチャットボットが対応します。患者さん向けの情報発信は、各製薬会社で行っていますが、それぞれ構成も異なっており、患者さんにとっては情報を収集しにくいこともあるかもしれません。協議会のような専門的な組織が、各企業の情報をわかりやすく提供していくことは、患者さんにとっても非常に価値のあることだと思います。

—協議会では、今後も一社ではできない活動を、皆さまと協力しながら行っていきたいと考えています。今後、当協議会に期待されることはありますか。

ステファン 現在行っている素晴らしい活動を、今後も継続していただきたいです。患者さん、とくにティーンエイジャーの方は、自分のスマートフォンで、短時間で情報を収集する傾向があります。情報を発信する際は、長文

だったりすると見ていただけないことがありますので、簡潔にまとまっていて、見やすく、興味をひくデザインだと、より注目されやすくなるでしょう。

スウェーデンの事例を紹介すると、「ネキシウム®」の包装箱に入れる患者さん向け指導箋のデザインを変えました。大学でデザインを学んでいる学生に協力してもらい、色づかいやレイアウトなど、構成を大きく変更したのです。これが反響を呼び、賞を受賞するなど高い評価を受けました。新しいやり方に挑戦することはアストラゼネカのバリューの一つですが、この患者さん向け指導箋の事例は、患者さんに貢献することができた大きな成功例だったと思います。

俵木 ありがとうございます。とても興味深くお聞きしました。協議会では、くすりのしおり®の閲覧者を対象としたアンケート調査を行いました。くすりのしおり®を見にきたけど、くすりのしおり®になかった情報は何か、そして患者さんが知りたい情報は何かを調査し、そのデータをもとにくすりのしおり®全体の見直しを行っています。来年4月にはスマートフォンで使いやすい、よりわかりやすい新しいサイトに切り替える予定ですので、よりよいサイトとなるよう、更なるご指摘をいただければと思います。

表紙のイメージについて「ドーナツミーティング」

アストラゼネカでは月に1回、国内の全社員をつなぐ「ドーナツミーティング」と称する全社ミーティングを行っています。横断的な情報交換の機会であると同時に、社員のエンゲージメントを高める場となっています。

この対談は十分な感染対策のもと行われました。

AZバリュー



私たちはサイエンスを追い求めます



私たちは患者さんを第一に考えます



私たちは勝つことに注力します



私たちは正しい行動をとります



私たちは新しいやり方に挑戦します